

明島後上巻

八編上

^ 13
2909
25



13
2989
25

明
子
孫
三
孫
全
傳
終
弟
八
帳
完
三
冊

江戸

作者
画工
狂訓亭為永
柳川重信



浦里
時次郎

明
宣

上

涌泉堂上碎



元祖

鶴賀若挾椽

三味線

鶴賀舛六

一女
鶴賀鶴老

菊沢八十七

未熟
初公

惠
子
一
善
志

二代目

鶴賀鶴吉直傳

もろくろの法場を法深一巻の雀籠り家のいんた
なで傳はるる節事備しまぬ惠我あつた

ももくろくろのいんた雀籠り雀籠りが追善の二曲ハ付
ももくろくろのいんた雀籠り雀籠りが追善の二曲ハ付
ももくろくろのいんた雀籠り雀籠りが追善の二曲ハ付
ももくろくろのいんた雀籠り雀籠りが追善の二曲ハ付
ももくろくろのいんた雀籠り雀籠りが追善の二曲ハ付

幸二

まあり彼女子既ふ神世く一因と吊るる門人集ひ
その追善の唱和をこぼしをいより止しをいよと書ひて世ぬ
此の歌子歌籠りの弟ハ強と草さきつてさうまるといひ
いよ此の歌子歌籠りの弟ハ強と草さきつてさうまるといひ

前楚満入

女 為く承すまふみ識る

古今集

浦野



いそ

せ

め

あ

い

あつち

うた



うたの
あつち

あつち

あつち

小野

小町

瞳の助



運平丸

重三郎



山崎

おせん

いせよりの
おせん

おま

おせん

二

明為第九編 三冊 為永春水著 柳川重信画

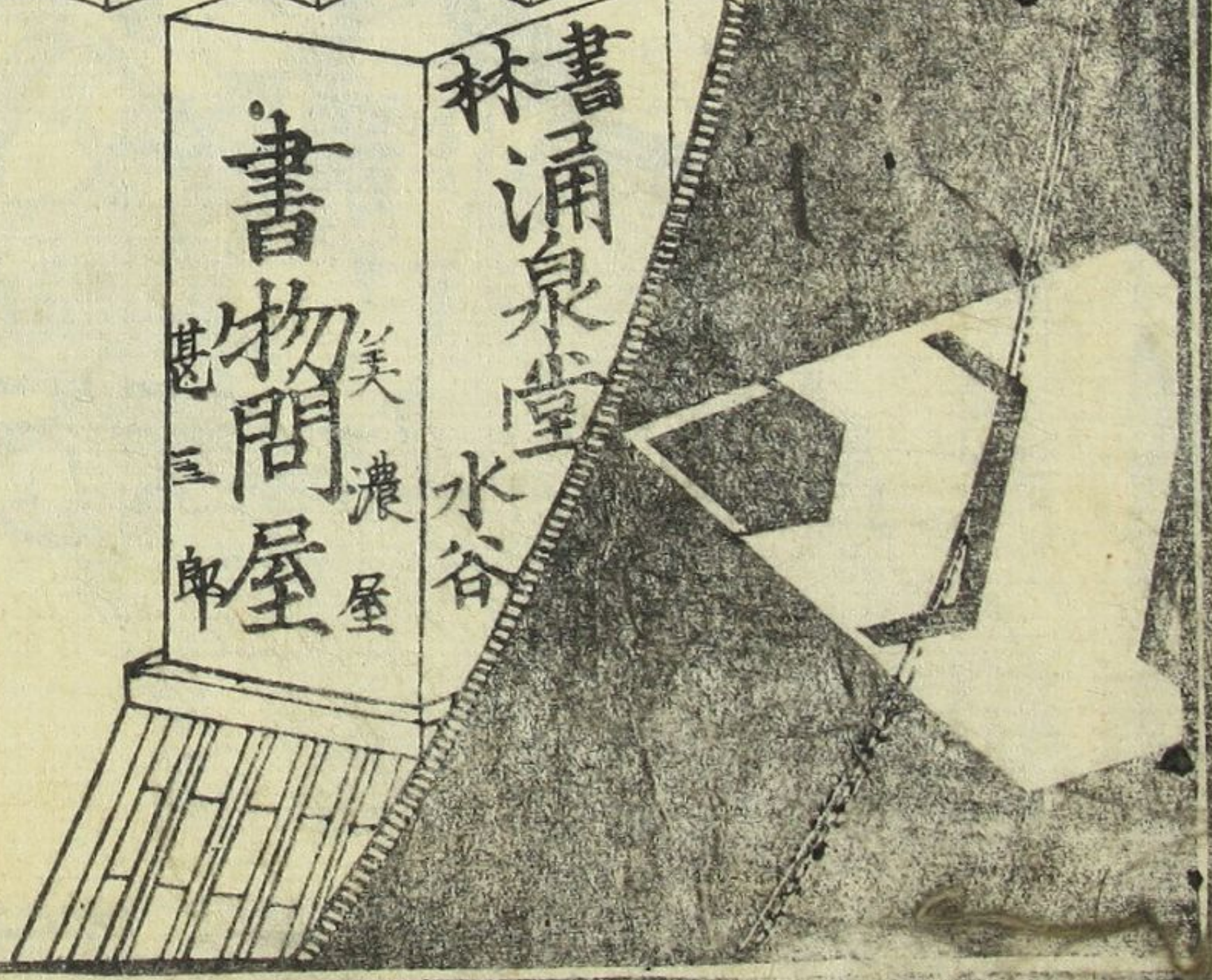
明為第十編 三冊 為永春水著 柳川重信画

出雲於國物語 故山東京傳遺稿 画 東京山校合 五波高國貞画

美艷仙女香 一包代 坂本氏製 四拾八洞

黒油美玄香 南、八馬町三丁目いりり物乃 一月代四十八孔 坂本氏製

初美 おけのとらふゆき 為永春水製



後編 寢覺線言卷之七

江戸

為永春水作

夫信言ハ美らむ。以て童蒙と誡む。美言
曾く信らむ。以て婦幼と慰む。狂言綺語と
いふも然らむ。あま相摸の国足柄の麓なる十寸村の
片傍に。その名ハ何と云ふ。果の浪人夫婦。一
個の湯先頃より。腰さたねと康病子ゆへの暗貴を

新編

賤しきも亦おきてきて焼野の雉子夜の雀をよよとく
して笑ひ負ふ事なく欲さふさ多くと心はくせど貧家の住
居朝に焚米ゆゑより。五面十面まらむどるが價の
高きも業ハおろろ。何一ツギて自由るわが精よあり
病人のきも枯木の虫に似く。弱り果る風情あり。
火鉢の側に父おやハ小首傾け物あんと。渾家も偲
眉に皺おろしと因果る此のえきも。きりきり
る。終ふ曲つて喜もせむと正史ゆきて人どが。此に

引かけてい多くと。世情とわらう喜もあり。難儀と救
ふことともあるのみ。不図おぼしきと出てくる。あけい
間多く苦勞たより。其う大事のお主イヤ。そらでいゝ
息子の病も。お函者もええな又放して。迎もよくる
喜でいゝると。とわててもよやくと高イ業も信やうふ
まご住るね此里より少々の五面もるわらう。女児
と郭里へ預ておき。金もあつて人參のさ。熊の糞の
まねの。函者の家の秘法よとて。最大かね

あつた

二

あるふの心任せよ。自害とるさうも首と
 おぼりあるさうも決してお止りませぬ。娘一サア
 その決と持るさうも死ぬるさうも死ぬるさうも死
 うがまゐる己がてふ。盒と探して刺刀るんぞとせ
 して死るふと志ませうぞ。ひとせぬ決がむさうぞ。
 其処ハおぼを推量して。浦ノエ推量でわたりま
 せぬ。あるこの心づらうとして。およおせませう。
 多く。死とありまゐりまゐり。二人が年をふ詞とま

渾家のおおと漸くみ。曾るでもう。傍へよう。おへ
 へお姫さる何とぞ。その中なるまおつやうま。上二
 へおぼのよみこのおもひを。死で花更ハハ。おのませ
 ぬ。私とく色くと貪る。うらで鬼や角の。おも
 ぶおぼ二個が息のうら。一月るのと元の。此よかり
 へおとくり。う一。おで惜るも。の日と送る。ま。お
 へん。さるも。その色り。刀。お。お。心。さ。入。時。ま。し
 へら。千。葉。家。の。姫。君。一。国。一。城。の。お。借。伸。へ。心



浦七郎

縁付とも抱ぶとお身。めつるまゝとるさうりまほし
 娘一本。こころとあこころ。人あもあうまは死なふとま。
 豫て覚悟とこころと何とりのあもはに久しく
 飯も給ぬめん。陰意とちげと。眩暈がさるるやとあう
 けと刺刀と突立かうとてこころも腕を震ふる力
 つまゝめらむと後へ倒してこころので。多うりの飛と其
 方元ふとらひひくまこ更くまは浦。コレお扱お湯
 とあひやま。さうま絶食で。水はまもふんくと

腰と抱きてござる病人氣と揉むくハお病ハの障
 となるハ眼前もやう。そのうまをさるさる。煙草
 吸すも油ひハさる。多く。揉むおるりかされ。肌
 氣とちぢめて篤く。此浦をさる。律訳とおぼく
 るされと下さりのはし。トのひく。其知へ常姫の重三と
 寐さると心の裡。たうに夫と。曉と。明てい
 皇女玉櫛等。二人が心と常姫が。あひをたねがらや
 ち。海。せらる。洞と。あうね。悲中と。あうで。床の海。

らたて流く。泪川。枕席。支汚ぬぐ。かろ所。表
の方。おたのそや。二人連。イ何方。うら。ご。う。ま
し。こと。狂。お。お。不。審。負。今。も。る。ぬ。ぬ。り
ほ。漢。子。ご。み。から。世。み。り。み。で。ん。ぶ。う。う。の。他。の。持
ら。で。う。多。宿。人。さ。る。を。り。心。當。る。る。と。あ。ん。ど。何。う
用。あり。え。う。お。お。ハ。お。う。笑。ひ。と。會。き。ま。お。ま。人。交
何。の。用。で。ご。あ。ち。う。ら。お。出。る。ま。い。て。ご。の。ま。い。近
所。と。お。尋。ね。る。ま。う。の。な。ら。吾。儂。ご。も。ハ。ま。の。野。へ。近

ご。ろ。ま。り。ま。い。こ。ゆ。隣。の。人。さ。陸。々。初。う。む。ご。う
ぞ。外。で。お。ま。る。ま。い。ト。半。と。り。ま。い。く。ア。コ。か。ま。さ。ん
今。隣。で。ま。て。ま。ま。い。と。此。処。バ。ノ。浦。を。あ。さ。ん。の。住
居。で。ご。尋。ね。ま。い。う。ら。ま。お。ハ。浦。を。あ。と。中。ま。た。ハ。此。方。の
亭。世。で。ご。の。り。ま。い。が。マ。ク。ご。の。よ。ま。用。が。あ。り。く
ト。臍。子。痕。の。り。悲。し。ま。さ。若。人。教。の。頭。ハ。ま。い。て。ま
此。人。々。の。風。俗。ハ。ご。う。や。ら。目。あ。り。一。疋。引。と。ま。ら。い。ま。い
打。拵。は。氣。も。顔。倒。そ。の。挨拶。も。跡。や。さ。れ。彼。男。ハ

縁起の事

ころひか身みでま老おきな内うち系けい。そのかうに肝きんと膝と腹と
 であるめとのりであしとひあしとらまんざら肝と
 洗ぶさばめも履からしまんがマクくそのやアゆりと
 お家のちやせらの免めんるせト腰らちうけ。二人の草
 鞋トの紐とぞく。誂いくく道みちと捨てもあつまだおへら
 に盥がびごりまさと足とお洗すぎるませ男おや
 三盥ハゆりやせん裡くの処とふ井戸があらう子
 松お井か戸かハッイ其処の勝かの外もごごりまん

手ての外にごごりまん男おえるら井戸で洗あい
 やせらのマクくはもあつまりるまえる。あらねいまと
 いりまア。江戸えどよりよろろとむごりまさでちのよはれ
 氣き散さんとトいひう二人の脊せのと其かも在
 あは下げと提てゆあとお松が思案のるえで
 もこの再ぐが。他たにからるとるまん。あしと
 るまが汗とはぶさら。ゆりといまんと二人が口旋ま
 合あいあらむとるの間は姫の重三と女お抱の良い人が

傍へまゝりよる。遠般として低言バ浦をあらは眉と
頻り「それなり」ども合言つゝあぬ。おせと殺して祟り
あらんぞ。まこととは非ざるん。どうするかのうと
いふ人、聖ともおまぬは病人。おまが居るので
一冊も。その一冊で仕方もあるま。逃ぐとけハ
遁ぐが上分別であらう。おまもくそれハそ
でござえ。世が世のそらであらう。又悪
のおせぐらぬ。殺してまも慮外のの。うら捨

まゝいひていひまあど浪人といひ世とまのよ。此も成
たての悲しさあは。樹の影もくま胸のこと。ま
わびでござうらま。何れもあつるんが。おまハ
留守ごとやませう。そして吾儕が驚くつと。その
用ひたどおまして。羞もおせと殺してま。い
ま甘うまも。まといひ定るる。証極もあるんといふ。
学んぐるわといひま。夫ても彼もいひま。又其
時ハ一分別。浦へま。まあつての。い分別

るがあら

コレお松まつ氣きとあちうけてあつふりと。よくあぢあぢ足あしと
 ちうまのちうに。はと利きやねい。今いまるアトあつふ首くび
 とかうらうと母ははと懐なつかにさうしてて眉まゆと頬ほむらあそぶ不
 ねねるらう留守留守とこいひまほら。たごんあつふあつ
 とも。あつと堪たえて容ゆるふとが。篤あつうらあつふあつあつ下
 いらうは方かたへいでもあねが。以前の漢かん子こハ二人とも足あしと送おくて
 曲突まがとの傍そばぶらと坐まして紅皮べにかわと青皮あおかわと以もつて造つくらる。
 根ねの穂ほもしくあつふ。暉あつくさる。たごこいさ。あつね

探たづめく引ひきでく。くあらは相あもも。丁てい子し入い膝かの傍そばへ
 落おちりし塵ちりとをえと。屋や根ね裡うちふ。積つつと。煤すすの風かぜ
 の間まふ。ひくく動うくと眺ながめてとり。お松まつハ権ごん子すの茶ちや
 と汲えで二個ふたごぐ前まへへさく。出いて。おおづらうらうらぞんド
 まつねが。さぞお草くさ那なでござりませう。誅せるお茶ちやも
 出いて。売かいであつふ。さまは。折おく。お尋たづね下したさりまう
 へ。生あ憎や今日こんにちハ浦うらちも。扱ある。用ようが。あつふ。遠とほく
 へ糸いとのまう。こも。入い。務むふ。よら。さら。海うみも。初はつ度たび。シテ

探たづめく

一三

多おまへさん方ハ。何の川用でござりまはる男ハ。正
 らア荏土くらめり申。この外の女でもござりやせんが。
 此方の女見ハ浦里さんの一件で。ござりやせんが。テ
 ぢかハ浦里を。さんガ。多。ト。ヤ。些と困。コ。ソ。ハ。多
 一。海。も。知。お。人。と。り。ひ。ま。ま。も。や。ア。そ。う。便。々
 と。待。て。も。居。ら。ま。じ。だ。お。め。さん。ハ。浦。を。さん。の。お。ま
 さん。で。び。び。ひ。ま。ま。子。お。い。し。と。い。ハ。浦。里。が。母。で
 松。と。ヤ。ス。の。男。が。そ。ん。ら。お。め。さん。ハ。お。め。さん。ハ。

此亭主小遇とも同お。と。一。ハ。浦。里。さん。の。判。人。で。
 馬。乃。の。鞍。藏。と。り。ひ。ま。ま。の。ま。こ。山。人。ハ。山。名。屋。の。参
 で。田。町。の。案。山。田。部。と。り。ひ。ま。ま。が。斯。二。人。と。く。遠。方。へ
 昇。り。て。ま。あ。つ。こ。その。こ。ひ。ハ。ア。コ。ト。彼。も。し。て。四。五。十。日
 ぬ。ゆ。り。ま。せ。ら。が。不。圖。と。度。々。ら。浦。里。さん。が。病
 氣。ば。ら。て。ま。く。と。茶。と。飲。せ。雜。妓。も。い。や。そ。め。ら。
 深。切。ふ。く。音。病。と。い。や。た。が。ど。う。も。鬼。く。む。づ。ら
 一。れ。け。席。ハ。絶。食。で。西。者。も。大。禁。足。放。一。申。と。

ミテその病氣がわつらなまに折るア子この腰の内うちで
 変る声こゑとゆーいやまふ。その時ときあやア當人あたひと。体ていに
 死しも同どうあま。傍そばでうしくきりはきて居ゐりやアおれこゝろあ人と
 うけうのこゝろに。秘ひをうらまてう悔なげふ。その時とき之助しすけが身み
 とめりく。あひと暗くらとるんぞとらやる。まここあひ女に
 の声こゑで。良人りやうじんに掛からさむううして居ゐる。活生くわくせいて居ゐらぬ
 中なか。今いまにも死しんぞうう悪鬼あくまとるのこゝろ。その一いつまれと
 ぞり殺ころたとと大音おほねあびてハあはぶううう。まま時ときでも

おつふ笑わらううなり。その時とき浦里うらりさ人の怖おそいさハ脊中せちゆうに
 武者むしゃ張あの彫物ていぶつで火ひの中なかへでも飛と込こると命いのちあつ
 どの俠者ていさでも。舌しつと震ふるて戰慄せんりつあつく傍そばも寄よ
 つけお入い先せん以い名人めいじんの爪つめ毒者どくしやがびらうう。逆さかも茶ちやも
 走はらぬ。あつけ自じ然ぜんと走はるうと茶ちや一いつ貼ても走はる
 せむで。帰かへらうしう今いまあ入いバ。走はるとりああのハあきき氣き
 休やすめ。とても死し病びやうといえさうううら茶ちやもあ入いの
 であらうと内うち籠かごの目め形かたちもあいううう仲なつくあ処ところ

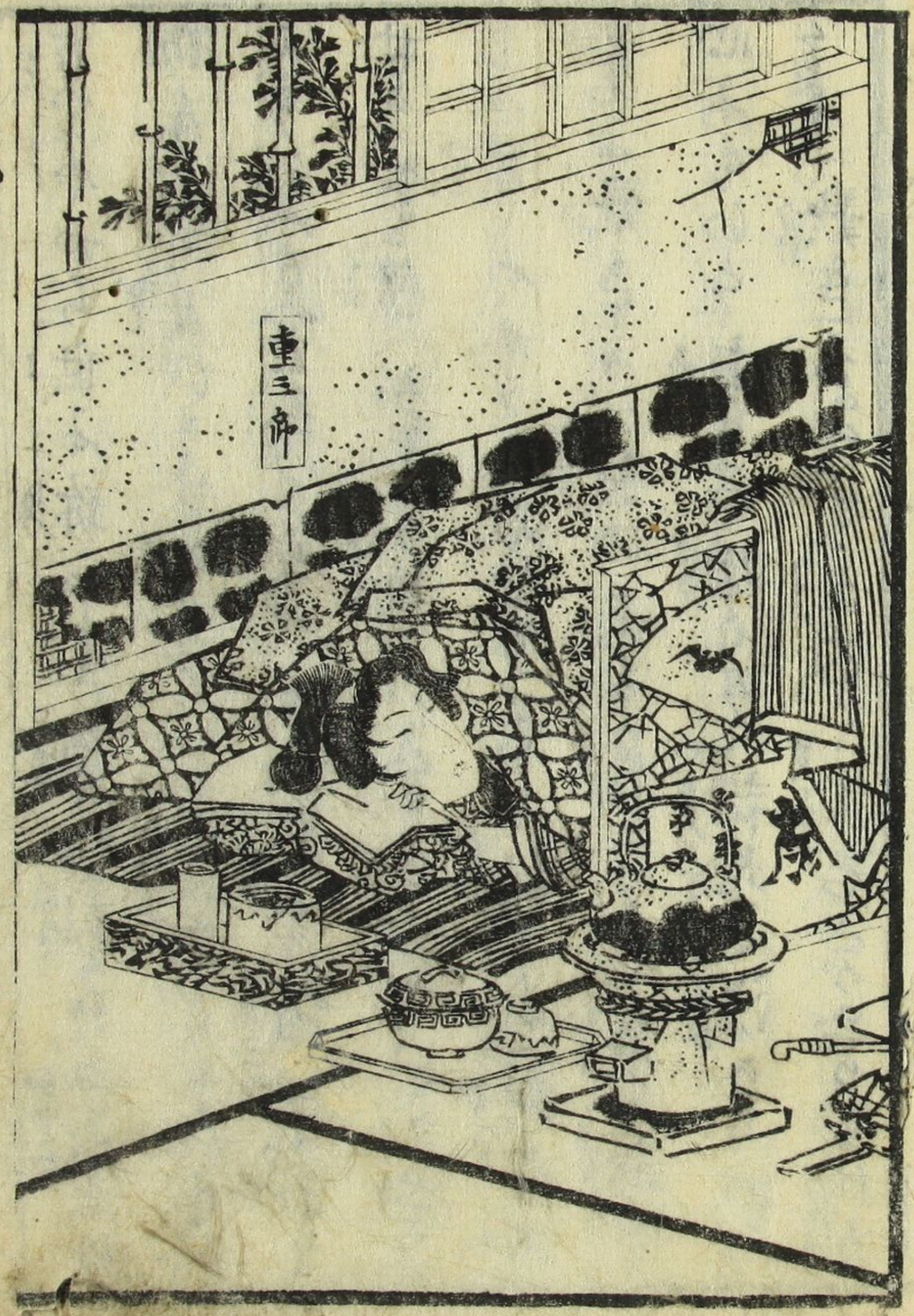
であらうと云うる。ちよろつうま真下やア、（ト）びりやせん
 今日一日も（カ）覚束ぬ人など其処で且（カ）多此間も
 浦里さん（カ）グよく落（カ）はなす。うとろくとしてあると死
 傍へ往（カ）て色くと。何ぞ此（カ）に（カ）覚（カ）ぐある。何でも人
 の生（カ）天と死（カ）天（カ）グ混（カ）して着（カ）と容（カ）子捨（カ）てお（カ）は（カ）命（カ）が
 る。学（カ）ぐある。隠（カ）さす。何して（カ）受（カ）ける。そうす
 且（カ）バ加（カ）持（カ）や祈（カ）禱（カ）の仕（カ）方（カ）もあると。静（カ）か（カ）考（カ）る
 受（カ）る。浦里さん（カ）のゆ（カ）ひ（カ）る（カ）あ（カ）やア。今日（カ）を

少（カ）も（カ）濡（カ）奔（カ）ら（カ）ん。そ（カ）ぎ（カ）り（カ）と（カ）こ（カ）受（カ）も（カ）る。マア（カ）言（カ）
 る。何でも人（カ）さ（カ）る。眼（カ）と（カ）う（カ）ひ（カ）る。学（カ）ぐ（カ）ハ（カ）る（カ）と（カ）言（カ）る（カ）さ（カ）る
 のも信（カ）ら（カ）く。そ（カ）り（カ）して。コ（カ）ま（カ）ハ（カ）決（カ）が（カ）分（カ）ら（カ）ぬ。其（カ）処（カ）で
 コ（カ）ま（カ）グ（カ）コ（カ）ま（カ）ち（カ）ら（カ）ふ。親（カ）の（カ）方（カ）へ尋（カ）ね（カ）て往（カ）て。う（カ）く
 容（カ）子（カ）と（カ）何（カ）して。こ（カ）ま（カ）の（カ）ま（カ）ア（カ）候（カ）と。瘦（カ）と（カ）何（カ）と（カ）一（カ）日
 も。油（カ）の（カ）あ（カ）ら（カ）ぬ。大（カ）病（カ）人（カ）若（カ）あ（カ）の（カ）ま（カ）に（カ）な（カ）る。と（カ）死
 中（カ）も。何（カ）う（カ）速（カ）界（カ）中（カ）こ（カ）ま（カ）で。親（カ）に（カ）へ（カ）も（カ）氣（カ）の（カ）毒（カ）る（カ）亦
 その（カ）決（カ）と（カ）何（カ）して。コ（カ）ま（カ）を（カ）。そ（カ）ん（カ）あ（カ）ら（カ）斯（カ）り（カ）い（カ）ま（カ）ぐ（カ）あ（カ）る。若（カ）

その祟りよやアありめ入うと。いふ哀もあれえんど
といふりあるから昨日の朝荏土と出て死なうに漸く
あねてめりやとト思ふのころとあねの聲に彼人
殺の真でいふあうと妻の胸はあらはやく。まが一方は
安心と。人多も孫子の花よりもあつと惜と
育あびる一個の女兒主の病氣よ詮方なく。此
と活せしま悲しきよ。かゝる奇病よ責らまて露の
命も消あんと。まがなる親の心より。まがなや消く

吾あうま。良人よ告んと立あが且どあちとのいひ
するその口のまど乾うぬとあうくら。ましも出るこえ
どらうと咥しぬハテ。まを怪しうぬ少のあも
親の傍。なるまこまはどりませゆと目もあま
るん沢らうで。預て金と借まして。イそまるりに務
の此と。るりまこ子に心。まのわうるあひひで
あうと。あハ物してわ哽り。語ま出してわ二人
して。歎うぬ。日もこざりませぬ入。どうりの因果み

重三席



重三席



浦

高^トやから。世^イに珍^ウら^キ病^ハと引^ラけ。以^ハ因^ハ老^ノ
其^ハ手^ハも及^ビませねバ。さうで命^ハいざりません。
そりい^ハ高^トと多^クくらバ。と入^ル御^子が袖^ハを^ハ出^ス
せうとも傍^ヘおた。手^ハ放^スる^ハあま^ハせん^ニ。アモウぞう
し^ハ罪^トやからトあ^ラざ^ラと^ハは^ルて前^後不^レ
覚^ム歎^キま^シが。二^ノ個^ノの者^ハも^ハを^ハと^ク。鬼^ハを^ハ欺^ク
心^ハも^ハい^ハ良^キや^ハ塔^リらん。諸^共よ^ハ涕^リら^ハか^ミ
くら^ハ歎^ク。歎^キま^シる^ハも^ハ至^ルお^ハく^ハ尤^モあ^ラざ^ラも^ハ仕^ガ

が^ハあ^ラじ^シ夫^レでも死^ス人^ハ生^ス人^ノ。覚^メ入^ルハ^ハありません
う^ハ若^ク少^シでもあ^ラる^ハが^ハその^ハは^ハの^ハで^ハ祈^ル禱^スでも^ハし^テ
こ^ハら^ハよう^ハび^ラり^ハや^ハせ^ウこ^ハを^ハま^シてお^ハね^ガ心^ハの^ハ裡^ニ
死^ス人^ハと^ハい^ハお^ハせ^ウ。そ^ハし^テこ^ハを^ハま^シバ^ハ常^姫の^ハ病^ヲ
氣^ハと^ハら^ハも^ハを^ハ祈^ル禱^スと^ハあ^ラバ^ハら^ハら^ハま^シる^ハ。あ^ラら^ハ
り^ハま^シぬ^ハ此^ノ場^ノの時^宜。今^ハぞ^ハり^ハと^ハら^ハと^ハ氣^ハも^ハ狂^ラん
真^ニに^ハ二^ノ見^ハ浦^ハを^ハ。堅^ク唾^ハと^ハ春^ハで^ハ先^刻より。若^クも^ハお
世^ト殺^スる^ハあ^ラが。邪^ハは^ハま^シて^ハ言^ハひ^ハら^ハば^ハハ^ハ毒^トと^ハら^ハ

ち^ま血^ちま^らを^るり。今^{いま}来^きり^らる^二個^の者^も。その^ま坐^ざと
 去^させ^どど^らり^放。姫^{ひめ}君^{きみ}と^が肩^{かた}ふ^かけ^ても^ひと^まが
 此^こ処^こと^互退^{たい}ん^と。沈^{しん}吟^{ぎん}究^{きゆう}め^り。一^{いつ}刀^{とう}と^及ら^ちく^く
 て^ま居^いら^るに^業あ^ふ相^{さう}遠^{えん}の^女兒^が病^{びやう}氣^が。一^{いつ}か^ぬ
 あ^らう^時と^ゆる^りも^張ら^る時^もど^ろく^と弱^{じやく}り^果
 心^{こころ}の^裡。死^し灵^{りやう}ハ^あら^ふ當^{あた}ま^ども^明て^りを^まぬ
 其^{その}身^みの^罪殊^{とつ}ふ^々曩^{なま}ふ^由守^{しゆ}と^いひ^今ま^あら^ぬ
 於^あ安^{やす}く^客子^{きやく}と^まら^んも^大人^{おとな}氣^きる^と。あ^らあ^らう^ら

た^ひ一^{いつ}個^の息^{いき}と^のり^洞と^あの^び五^ご時^じ六^{ろく}時^じも^をり^さく^あ
 さ^らと^て此^こ度^{たび}病^{びやう}む^人の^ゆる^まバ^らい^と。此^この^障と^あら^ぬ
 る^ど於^あ渠^{きよ}等^らが^声。隨^{したが}ま^家居^けの^次と^奥ふ^ふと^お
 ぶ^くふ^ある^るあ^ら獨^{ひとり}氣^がと^探病^{びやう}人^{ひと}と^風目^めで^こを^まら^せ
 ち^くと^眠ま^る客^{きやく}子^し序^じい^らう^{。さ}ら^に彼^かお^せ執^{しやく}ね^くも
 崇^{たか}る^ゆの^うと^壯夫^{しやう}が^五體^{ごたい}と^絞る^熱湯^{ねつとう}の^行と^流
 て^つ對^{たい}居^いら^る。次^{つぎ}ゆ^々お^松が^氣と^沈め^いら^く考^{かん}
 て^んま^らす^も。人^{ひと}に^恨と^らひ^るあ^らる^{。お}お^なえ^ハあ^らう^も

御世物語

十一

びざりませぬ。らび色良人ガ帰らまへ。おれはこ
 して早速浦をあるり吾侪なり。社在土へまつて
 容子もい。且形もお目よか。おれもや
 ませう。やく。是ハハ苦勞と。挨拶は。鞍籠案
 山四郎へ。早くそ。早くそ。社在土へま
 する。半日でも。おれは。おれは。おれは。
 お世話。さぞ。おれは。おれは。おれは。
 む。おれは。おれは。おれは。おれは。

沓脱の草鞋。あつと。おれは。おれは。おれは。
 今。おれは。おれは。おれは。おれは。
 見。おれは。おれは。おれは。おれは。
 え。おれは。おれは。おれは。おれは。
 ま。おれは。おれは。おれは。おれは。
 お。おれは。おれは。おれは。おれは。
 入。おれは。おれは。おれは。おれは。
 浦。おれは。おれは。おれは。おれは。

不

二

音。お松も漸く心佳き。ふりかへば浦をめぐり今
 まで堪えなく汲洞控と尻居る高胡坐膝より
 泣く女房が声震つて操つてまて。あひをまはし夫
 婦が胸十方にうすくありあり。倍と心と流るる
 浦へやく返すまのこお松。と久後ても笑ふとも
 仕方の摸かりもるん始末。とろりよめの親子と
 うと僅二十里をりの道。今くら起行ハ翌の晩
 ころ荏土へあつろ此形で。お園が身とこをて来やう。

イヤくそんむむどらうん。客とこをてら。おたりまど。
 おのひが坊をうりりその夏子のるんむうしを
 明らかめかりうり松へまよどどりりめて可愛そうに。
 女でなくも今夜のうちに。馬有り駕るり早
 うら同かり。荏土へ往と逢とんが何とゆいあむ
 吾儕ハ女。どうぞお主人一ト走。浦へ往み仔細
 もお人夏ぶ。氣づうりいぬる。姫きき。さる。死
 自害とるさうらうと刺刀るんぞとより出しく。

あまのりこ

七二

おさとりたるさきこその^母伏々。隱^くせどるふ^らり
 り^{あやめ}女児と女^ら肆へ^を免^ら活して。者^ら病と^らる二人
 か心と^らの^ら毒^らら^らての^ら夏^らを^ら必定^ら今^ら々^ら往^らと
 帰^らるまで。四^ら日^ら五^ら日^らも^らか^らら^らう^らが。その^ら内^ら益^ら夜^ら氣^ら
 とつ^らけて。短^ら慮^らる^ら夏^らと^らせ^らや^らさ^らる^らヨ^ら早^ら言^らん^らる^ら
 苦^ら勞^らと^らさ^らる^らも。多^ら病^ら氣^らと^ら率^ら一^らと^ら自^ら害^らる^ら
 さ^らま^らく^らよ^らん^らる^らど^らを^らら^らる^らの^ら氣^らと^ら採^ら取^らら^らる^らん。
 心^らの^らト^ら妻^らの^ら負^らコ^らを^らば^らお^らね^らも^ら洞^らと^ら見^らへ

こ^らこ^らが^らお^ら傍^らふ^ら付^らて^らる^らら^ら。氣^らづ^らつ^らひ^らる^ら一^らに^ら些^らも
 とも^らも^ら浦^らへ^らそ^らん^らる^らら^ら跡^ら々^らた^らの^らん^らど^らと^らあ^らが^らて^らり
 だ^らと^ら後^ら引^ら脚^ら半^ら。垣^らよ^らか^らけ^らら^ら古^ら草^ら鞋^ら。こ^らら^ら災^らひ^らも
 三^ら年^らと^らな^らめ^ら甲^ら斐^らま^らく^らく^ら打^ら扮^らて^ら跡^らよ^ら心^らの^ら遺^らを^ら共^ら
 女^ら児^らが^ら安^ら否^ら也^らあ^らら^らと^ら竹^らの^ら皮^らを^ら眉^ら深^らく^ら被^ら
 つ。喘^ら々^らと^ら走^らつ^らと^らあ^らく

ね^らさ^らめ^らの^らり^らと
 寢^ら覺^ら線^ら言^ら卷^ら之^ら七^ら 畢

